

サルとサルの「取っ組み合い」

遊びなのか喧嘩なのかサルにもわからない!?

島田将喜

しまだ まさき / 帝京科学大学

取っ組み合いをする大人たちは、それが遊びだと了解しあっているのに、外部で見ている人に、喧嘩をしていると誤解された経験はないだろうか。サルの世界でも、母が我が子の取っ組み合い遊びを喧嘩と誤解することがある。



あそびを巡る困難

勤め先の大学で「遊び論」という講義を受け持っている。遊び、といういわば当たり前の言葉・現象を対象としているのだから、わかりやすそうだし、簡単に単位がもらえそう……そんなことをイメージして受講しようと思う学生も多いのかもしれない。たとえば写真1~8のようなやりとりの連鎖を観察すれば、写っている動物の行動や生態について詳しくない人であっても、たいていは「彼らは取っ組み合って遊んでいる」と述べる。それは正解であり、このことは遊びという現象にはたしかに直感的なわかりやすさがあることを示している。

写真の動物は、私たちヒトと同じ霊長目に属する動物の一種ニホンザルのコドモである。ニホンザルは下北半島から屋久島まで日本列島内に広く分布する霊長類で、私たち日本人とは歴史を通じて共存関係を続けてきたなじみ深い動物の一種である。

さて写真の取っ組み合いには、相手を「噛む」「掴む」といったサルの動作が含まれている。私はそうした動作の連続やその結果、あるいは生じている状況などを全体的に見て、「サルは遊んでいる」とたやすく判断できると述べたが、喧嘩の際に生じる「噛む」「掴む」と遊びの際のそれらとを、動作だけから弁別することは、実は大変難しい。

本稿では、この弁別の困難（不可能）さが、サルたち自身にとっても問題となりうるかどうか、ということに注目しよう。野生動物を対象とするフィールドワークをしていて、私がもっとも対象に近づけたと感じるのは、（遊びか喧嘩なのか）私にとって判断が難しく感じられる現象は、実は

サルたちにとっても判断が難しい場合があるのだと理解できたときに他ならない。

遊びなのか喧嘩なのか

事例とその解釈

分析の対象とするのは、私が長年調査対象としてきた野生ニホンザルの群れ「金華山A群」のサルたちの中で、2007年9月11日16時24分に観察された数十秒間のやりとりである（動画は以下から視聴可能 <https://youtu.be/pnj91LzqHrM>）。以下に出てくる、ラキ、フク、ララ、ハロ、アルト、そしてアリサといった単語はすべて対象としているサルの個体名である。サルの年齢区分では4歳までをコドモ、5歳以上をオトナとすることが多いため、この基準にしたがった。サル同士の微細なやりとりの内容を十分に理解するためには、彼らの行動についての予備知識が必要だ。場面の流れに沿って、知識を補いながら解釈を進めよう。

[場面1] ラキ（1歳オス）とラキとは血縁のないフク（低順位オトナメス）が寝そべりながら取っ組み合いをしている。彼らと接触しつつラキの母親



写真1：見る



写真5：噛む

ララがハロ（低順位オトナメス）を毛づくろいしている。4頭から3メートルほど離れた場所で、アルト（1歳オス）とその母親アリサ（高順位オトナメス）が毛づくろいしている。

毛づくろいとは、霊長類においては、シラミなどの外部寄生虫を取り除く機能をもつと同時に、相手との仲をよりよくすることに用いられ、喧嘩後の仲直りにも用いられる。この場面のように母子間での毛づくろいは、もっともよく見られる、まことに平和な光景である。ラキとフクとの取っ組み合いは、両者が寝そべりながら、相手を掴み、噛む動作を継続させている点から、喧嘩ではなくオトナメスとコドモとの間の遊びであることが容易にわかる。

さてこうした状況で、毛づくろいを切り上げたアリサ、アルトの母子が行動を起こす。

[場面2] アリサとアルトが並んで歩いて、取っ組み合いを続けているラキとフクに接近する。アルトがフクの背中に手で触れると、フクが寝そべりながら、接近したアルトに手を伸ばし、アルトの顔を掴み、さらに足を掴み、フクとアルトが取っ組み合いになる¹。ラキは母親のララ、フクと接触したまま座る。アリサは四足で立ち止まったまま目の前の様子を見ている。

フクが接近してきたアルトに対して、手を伸ばし顔や足を「掴む」という下線部1の動作を行ったのは、直前までラキとの間で取っ組み合いの遊びが成立していたことの延長として、アルトに対



写真2



写真3



写真4：近づく



写真6：組み伏せる



写真7



写真8：掴む

するごく自然な遊びの誘いかけだったと考えられる。これを受けたアルトの方も、その後寝ころびフクとの取っ組み合いに移行することから、誘いかけに乗っていることがわかる。つまりアルトはフクの動作を遊びとして理解していたと考えられる。

それまでフクと遊んでいたラキは母親のララとともに小休止した。問題は、これらの様子をじっと見ている高順位メスのアリサの挙動である。

[場面3] 数秒後、アリサはフクに手を伸ばしフクの顔を叩く₂。フクはすぐ座りなおしアリサに対してグリマスする₃。ラキとアルトが取っ組み合いを開始し、すぐに終わる。同時にフクはアリサに毛づくろいする。アルトはアリサに接触して乳を吸う。

下線部3のグリマスとは、内的な恐怖心を示す顔面表情のことである。それまで平和で個体間の順位序列が頭わではなかった状況に、はっきりと「アリサ>フク」という順位差が明確な状況が生み出されたことになる。また下線部2において観察された「叩く」動作は、遊びの際にも用いられるが、一方で攻撃的動作の一つでもある。アリサがフクを叩くのは一回にとどまり、継続されることはなかった。

つまり劣位のフクは優位のアリサに叩かれたのち、座りなおすとグリマスを向けることで、アリサに対して自らの劣位を示し、さらに毛づくろいすることで、相手との関係回復を図り、それ以上の喧嘩、暴力沙汰が生じるのを回避することにつながったと解釈できる。

これらの結果からさかのぼって考えると、フク

はアリサに叩かれた時点で、その動作を自らへの「警告」（それ以上息子と取っ組み合いを続ければ、次の攻撃を行う）と理解したのだと考えられる。

誤解の構造

当事者の一人であるアルトは、フクの動作を遊びとして理解し受け入れていたであろうことは、すでに述べた。ではなぜ母のアリサはフクに警告を与えたのだろうか。

アリサはフクを叩いたあと、写真1~8で見られるように遊びで通常連鎖するような「掴む」「噛む」といった他の動作を続けていない。このことはアリサがフクを叩いた時点で遊びを意図していた可能性が低いことを意味する。ニホンザルの母親は我が子に対して攻撃的行動が向けられた場合、子を援助し防衛しようとする（こうした行動をネボティズムという）。これらのことを考え合わせると、下線部1におけるフクの一連の動作ややりとりを、アリサは息子アルトに対する攻撃的な行動とみなし、それに対してアルトを物理的に援助しようとする意図を明確にすることが「警告」の意味だった可能性が高い。

つまり、フクとアルトの間では遊びとして認知された「掴む」動作や取っ組み合いを、アリサはフクからアルトへの攻撃として認知したのである。この事例は、ある同一の現象に対して異なる立場のサルが別々の解釈を与える、つまり「誤解」が生じうることを示す事例であるといえる。

誤解できるということ

誤解するということは、サルたちの認知的能力

の低さを示唆しているのではない。その反対である。誤解が可能であること自体が、サルの一つ一つの動作のもつ多義性を実証している。また動作を外部から見るだけではその意味の解釈は難しく、しばしば個体間で誤解が生じることを示している。これらはすべてサルの高度な認知的能力の特徴を示唆しており非常に興味深い。

上で述べたような事例の解釈が、唯一可能なものかどうかについては、今後実験的に確かめるなど検討の余地があるだろう。しかしここで紹介したような誤解は、私たちの子育ての現場でもしばしば経験することであるともいえる。私がフクの立場なら、アリサの仕打ちは理不尽だと感じるかもしれない。しかし、事例では誤解が生じた際の劣位者フクの瞬時の判断も適切であるといえ、仲直りとはどのようにすればよいのかを私に教えてくれているかのようだ。

サルたちの関係性を理解し、日々の生活を観察し続ける中で、私たちと似た（あるいは異なる）サルの認知の働きを見つけ、またサルから教えられる経験を積み重ねてゆく。そうすることで私たちフィールドワーカーは対象をわかった気持ちになるのである。

こうした事例を「遊び論」の授業ではたくさん扱っているのだが、学生たちにその感想を聞いてみたところ、私が楽しそうに講義するのが見てうれしかった、というコメントがあった。学生たちはよく観察している。私にとっては、講義も遊びなのだから。それは決して誤解ではない。